



新夷巡嶋記
第四編
卷四

春

庫書	165
5	80
166	162
40	番
	冊

13
3093
19



朝夷巡嶋記全傳第四編卷之四

東都

曲亭主人編輯

珪浦曲乃道人

田居中の女僧

中輯第三十七

當下廣光嗣忠の忙しくも成歎めり。義秀が左右のつゝも。嗣忠四下小
眼配は廣光聲を低く絶て久し朝夷ぬ。去歲乃暮春小松

めく端なく別れてさう。思ふ感し義を昔の日にさうさうとさうれは。今

とて忘さるふあななど。送る漕が暮笠は月さ暫時雲隠れく。敵致

躬方判りも形挑闘んとせん危る義苟且をさうをや。西歲何國を

徧歴志のひさる又いんの比より。當國小牙さうさう尊體いさく。是さく

圖らるる再會も。海月の骨ふあ心地く。歡び言語小竭難し。其知ふ



吉田屋

吉田屋

昭和九
七月二三日
末

侍も壮俊へ信夫莊司元晴翁も。こが主君ゆと使つて。馬娘標吉郎
嗣忠と呼ぶもの。則同志の義士あるは心とるおれもの。もと引合とて。嗣
忠も恭しく額をつれ英名豫く耳小裏く三郎殿と知らば。孤鬼の
カを搦とて。漫小虎威を犯さる。を礼を許させぬ。と勸解れ。義
秀うち領き。これも近属この地小牙と。足下の義勇を修め。二三
共侶夜をこえ。賊柵を窺ひ。決定めて欲さる。牙あんと。えれども。月
下小集合く時。移さる。遂に賊徒に怪れ。あら。こも。あつりありて。
今宵あら。狐徘徊と。その時刻尚早かり。霎時樹蔭に退れて。送
胸臆を盡と。二三も。先小立く。俱小回くと。一町許。葉取と。樹下小
目け入る。小裡面小小。堂あけり。荒果る。戸を推開く。義秀其処に
尻を懸ま。廣光と嗣忠の。左右。燈籠の。臺と。あつり。あつり。



石を床小。小う。ち對の。を。義秀。月を仰瞻く。夜は。中。あつり
つ。ふ。心。の。益の雜談と。先。説。れ。去
歳の春小松。二及一。小別。姿を更。信濃。小
赴。近江路。遊歴。一。冠者を。一。養母巴の。小
との。あ。や。せん。と。草枕。旅。日。を。弥。れ。も。親。も。友。小。の。竟。よ
得。あ。ら。む。當時。又。あ。平。冠者の父。蒲殿。の。平家。と。西海。小。討。れ。四。國
九州。小。年。月。を。累。ね。り。然。れ。ば。彼。地。小。恩。顧。の。もの。是。か。と。ま。る。と。冠。者。の
あ。ま。心。當。は。遠。く。西。國。へ。走。り。去。り。欽。北。で。遭。ね。る。西。に。逢。り。西。で。あ。つり
東。欽。南。欽。漢。天。竺。を。あ。つり。六十餘。國。を。遺。る。巡。る。遭。む。の。め。と
あ。ま。心。と。心。ひ。け。は。足。小。信。と。潜。ひ。く。華。洛。と。過。り。蘆。が。散。る。浪。速
津。より。衣。縫。小。針。磨。浮。吉。備。の。中。山。ま。る。く。小。の。や。め。づ。り。海。山。の。名。所。舊。迹



浮橋道人



瑠浦
義秀
榎道人
あ

榎の
か

小も心とちりて四國小渡り筑紫と赴丸西九箇國を編歴せし日肥前國
 珠浦のちりちりしと浮槎道人とみふ一老翁又鮮近と渠岡田行者親義が
 庶兄小倍田二郎在義といふのちりた木曾殿近江の粟津野あつた
 あつた比在義も亦罪を鎌倉小得と鎮西へ出奔し商船便船と
 海外ちりて巡歴するに數年ありて歸朝せしりのちりて萬國の地
 理を推究めく亦虫語を通曉しするといふ義秀去て歳の秋の比砥並俱
 利迦羅谷の邊より彼人の弟岡田親義が遊魂と問答しその白骨を
 瘞しとありとありのちりて成告る小及び道人感涙を堰あへて只管これ成
 蒼小留めく昔を語り今を論じ且その經歷し外國の風土物産のい
 さま迄説示せしと精細ちりて向學せん為ふとちりて杖を駐る程小經
 任誅伐のちりて時夏が賊中ちりて足利左典厩敗軍のちりて

遠く西小ゆめさる人の噂も七十五日過て吾侪の春ちりて今茲正月の初
 ちりて吾黨恩赦のちりて街衢小櫛を掛らとされば日也歡とちりて彼時
 夏が奸惡度覺と義邦赦はあひとちりて必故郷へ還るちりて今ちりて
 外小求んよりと下野へちりてとちりて浮槎道人小成告り辞し
 別とちりて月の望の比歸東の杖をいそがら二月の廿日あつた華洛ちりて
 又ちりて小奥六郡の賊乱超過と信夫莊司ハ戦歿しその背冠者義邦
 夫婦ハ賊徒の為小生擒とちりてその戦ハ如此とちりて箇様と風聞
 ちりて小ちりて吉見冠者ハ奥の信夫小身を寓しと僅小知とちりて
 甲斐ちりて獨逸感と堪とちりて猶も虚実成探とん為とちりて華洛と立
 ちりて若狭より越路小赴れ急とちりて日ちりて経とちりて二月の中
 陸奥小ちりて又鎌倉より軍勢下向し又賀藏人光仲駿河前

司廣綱而大将とて再々経任を討せしむ。廣綱の名ハ豫てそのあり。先仲のより定るるをねばを多く人小を其向の小知者あり其を云ふ廣綱の背中と此度追伐の惣大将とす。この人初乃姓名も温子井平と呼ぶ。下司ありと侍人なり。虚言ゆへありと云ひ人の僥幸兼連ハ和漢今昔珍しきを驚くべし。彼井平ハ冠者を捨て獨采利小走りて軟交遊の義信孰ふあり。あは憎むく親むべし。あをのりく光仲と井平も同人あり。成和も。其の陣門へ下つても言つせせむ。この地は身を潜めく。その軍略をんく。渠が龍蛇茂林の戦ひ小暴道時夏を撃み走り。鎮守府の城を攻取らん。かく平泉の柵を攻んと。泉川の上までいく。経任ふち員ととも。更小計りて。経任が大軍を追ひ走らし。進く柵を圍まがら。

東小攻撃とて。徒小日を過る程小士卒を時疫小よ。病死とる。少くも且その兵糧竭とんと。尚今賊徒城戸を焼けて。めり。渠よく。柱んや。他の資を借を獨柵中小潜び入。冠者を拯ひ出さんと。難くもあぬ。且く。空う。他の功を奪り。柵を攻む。その外乃勝負小からひて。輟射の危急を拯む。冠者を枯魚の市小賣られん。さ。今宵更蘭。柵中小潜ひ入り。友をも拯ひ取。経任を撃殺す。寄ふ小眠を覚。甲夜の間に。賊柵小迫つて。斬首の浅瀬を。程。冠者の内室。和政達小環會。極ひぬ。その。又その。二月の上旬。主の使を承。

鎌倉へ起り又嗣忠の爲に越の稻向許赴りて主の先途小あざ
 ず。そのるの故あり。巨細小傳ゆき。介後のるのゆき。同
 廣光床几をもち。度既よき。其の二月。鎌倉へ使せし。小
 冠者の外戚足立盛長ぬ。ゆる正月下つる。小舟まら。その子息
 景盛ぬ。内室つる。ゆる。君の御氣色を蒙りて。龍居の折られ。が
 密言をヤ入る。小うき。そのく。程小奥の凶変ゆえ。慌忙立
 之。館へあら。焼亡せ。ぬ。その人。この白骨成の
 とい。送恨中。ある。大履の既小類。孤匠の興。死小
 わ。冠者も。置姫も。賊柵。存命。ゆる。小聊慰め。と
 彼此小立。の。野形村の。標吉郎嗣忠が。越。ゆる。か
 来。逢ぬ。主の先途。の。憾を。送。説。盡。く。竊。小。興。復。乃
 大義を相譚。小程。小賊。徒。誅。伐。の。鎌倉。勢。を。當。國。小。来。著。せ。と。そ
 摠大将。光仲。を。舊。名。井。平。と。風。聲。を。ゆる。渠。が。立。身。と。ろ
 得。去。歳。の。春。下。野。を。冠。者。小。俱。と。北。國。へ。走。と。り。折。中。途。小
 仇。を。防。が。る。要。時。冠。者。小。後。と。も。加。賀。へ。の。ふ。り。廣。綱。ぬ。乃
 督。小。る。と。その。後。ま。つ。成。幸。ひ。ゆ。と。東。へ。赴。れ。と。小。を。か。れ。は。是。不。義
 の。友。あり。縦。豫。讓。が。心。に。似。と。も。不。義。の。人。に。後。つ。と。つ。公。を。日。れ。の
 あり。嗣。忠。も。亦。同。意。あり。只。この。二。人。が。微。力。を。盡。く。主。君。夫。婦。を。救。ん
 と。賊。徒。の。隙。を。窺。ふ。と。彼。塹。港。の。ほ。と。ゆ。の。要。害。を。こ。の。と。て。用。心
 等。閑。ま。り。成。灰。と。傳。せ。と。歩。を。浅。瀬。の。あ。ん。軟。と。彼。外。に。潜。ひ。道
 つ。と。和。君。に。環。り。あ。の。と。と。と。置。姫。を。救。と。小。加。比。乃。小。松
 の。野。で。お。か。受。る。再。生。の。思。小。も。倍。せ。と。飲。び。え。百。萬。騎。の。躬。方。を。ゆ。し

よつと頼たのくゆと惠めぐを謝あやまり。義ぎを述のぐ。誠まことありと忠臣ちゆうしんの心の真愛まゐひと
 歡よろこび小嗣こし忠ちゆうも腰こしけををまららく共ともに晚ひま死し目今いま江氏えうぢののいりまく如ごとくい曩な小
 某それが使者しやとらく越この岩上いわみ小赴こしゆつ。あらづら梢向しやうかう夫婦ふうふへこもも浅良井せんらゐの刀やいば自みづか母子ぼし
 彼かの一二いちに小こ対面たいめんせし小家こけの内うち皆みな恙やまさらず友鶴ともがかり刀やいば袷あはせへこ去歲こぞの秋あき産う産まの
 帯おびと鮮あざしとりり出生しうしんのいとい健たるるもも母はは脚あし八月はつがつごろののおのおのひひややううるる産う産まの
 冬ふゆ小春こはるももややごご床とこ揚あせせとと使まええへへ面めん謁ごうゆゆ及およびびりり彼かのもも此このもも朝夷あさひらぬぬ乃な
 信しんららがが不ふ樂らくししととここのの成なりのの早はや暮くれよよののいいりりととおのおのぬぬめめめめ折をりり本國ほんこくの大
 凶まふし夏あつもも彼地かのちへへももゆゆええふふままままららひひささららるるももいいららぶぶ盡つくささもも向むかひひ死しるるももいいららぶぶ
 果こささくく遠あてくく岩上いわみをを辞げしし去こららるる介すけ後ごののささららるる由よしののゆゆりりとと友鶴ともがかり
 とのの刀やいば袷あはせのの病い著つもも今いまのの瘡かさやや多おほひひええんん然しかららばば公こうかかととううべべいいささくく巴あまがが入いとと速すみ入い
 使しもも及およびびせせ多おほひひ多おほしし此こ度た寄よるる小力せうりきをを勤こめてて鎮守ちんしゆ府ふのの城しろをを乘のり取とりり城戸じやうど

水草みづくさの西にし義士ぎしハ共とも小信夫こしんぶの老臣らうしんなり守り註しゆ昌甫さうふが子こ弟あにめめと去歲こぞの
 秋あきより正法せいぽう寺ていの枝城でまろを守もりしゆめれ又また某そのも彼家かのけ新あらた参まゐりぬぬおおももと
 件けんの西にし義士ぎしとと回かへ識しるるををかかききびび彼輩かのはいをを憑たのぎぎとと寄よるる陣ぢん小加こか王わう微忠びちゆうを
 盡つくささもも由よしももありあり。ひひつつせせままししとと名なひひららるる舊里ふるさとのの馬うま形かたち村むら小雲こくも時とき隠かくれれ
 ここももかかくくもも謀まうををちちささままととくく潜かづひひくく彼かの小こ赴しゆくく折をりり鎌倉かまくらよりよりあありりままるる
 江氏えうぢ小こ仇ありり逢あひひ一いつつつ小こ寄よるる陣ぢんへへゆゆきき某そのハ彼光かのみつ仲なかつのの人ひとととままるる成
 知しるるののたたららぬぬとと使まいいくくがが如ごとくく聊りやうかか。江氏えうぢとと同意どういとと度たのの今いま宵よ小
 及およびび一いつハ寔まことに附驥ふきの福ふくひひええ況きやうとと雀姫すずめをを救すくふふ。時とき宜よろの相あ應おう不ふ思し議ぎとといいふ
 べべ抑おさ姫ひめとと何なにめめのの俱ぐいいややああららせせとと何なに処ところにに潜かづせせららるる鬼おに神かみとといいふふととも
 測はかららぬぬ段だん小ことといいひひららるるかかをを傷いたふふをを見みええららるる廣光ひろみつハハいいつつろろをを以もつつてて点
 頭あたまをを義秀ぎしゆ小ことと對むかひひ喃なん朝夷あさひら主ぬし雀姫すずめをを救すくふふ。度たのの越こりりゆゆををととるる。

再會の歡したと自他の物々るふ言々々々。いふと見参ふ暇ありた今宵
 俄頃の隠宅をふ近死にさうふゆのまやと向ハ義秀含咲く煙のふのふ
 今宵見参せられむとこも既小人を傳く。安居の里へ送りふ
 けれハ蜂蟻も刺さるとふのあやむと然ハその所以を説喝さんらより廿町
 あまやまの片田舎ふいとこびら草菴ありあるハ老る尼あるが只ひさ
 るん住よりけふ。こまのあつ日ハ彼知を過す。柴門を敲る。進入りそ
 湯を乞ひふいと叮嚀小歎待する奉動賤一かき。由緒ある人の幸きて
 かまろ果欬と推をふよ。不養母の胸ハ浮きく不信の信成起り。其
 素姓を問ひ小渠ハ秀衡が時平泉の柵ハ置置。某甲が女
 泰衡滅亡せりと死その父も戦死。親の菩提を吊ん為小祝
 髪入道せりと。衣川ある義経ハ始終の。篋煙の。送も

よく知り今之経任を悪むと鬼畜より甚。この後日又兩之母又彼
 ほより成過る毎小尼の安否訊伝し小尼一枚の繪圖を披き義秀の
 示をくいのち。是れこま平泉の柵の全圖。親の記る也。成
 為ハ要る力ハ抑平泉の柵ハ文治ハ破却せし。成経任修復して
 ち。抑より。かれハ文治の古圖と。今と大違ふ。又彼柵
 の後関より厨川へ通ハ捷徑あり。その路ハ云々。叮嚀小指圖
 君り用ひのち。進せんといふ。是れ教びく受納め。信夫
 彼知の案内ハ智を用ひむ。知れ只是の。信夫
 莊司が戦歿乃為体。二二ハ玄歳の秋金瘡愈。この地ハ才ハ
 冠者小環會。馬養標吉ハ仇敵。且その鎌倉と山石上へ
 使せし。知り説示。浮世ハ遠く籠居て知。

人のうゑをえよく知るのめを故にそあふめ偽流りく俗小詣ひ奥を催さ
 のあふと。と名の小々も疑ざるをたかく今宵和殿達小環會より成
 せけん彼女僧が言ひゆく信あり。千里眼を得るゆりの秋順風耳を
 の秋亦是不思議の人とゆふべ。ささば亦。きのふ泉川のこのゆきと
 今も蒙二郎が下野より来る小あひぬ渠へ玄歳の春の季小箱向許
 辞しとく。赤貝へ還りてくるの二三をよく知りつらめ。ささば此度初て使ひ
 現彼蒙二へ匹夫あるども。その忠心も世の人の及ぶ所あり。渠も亦その
 故主の賊徒小摘れとてゆめく驚れ歎くと大にささば。備は脱れぬ
 ちよその骨ありとを拾んとく。今暇あるき耕作を人小任し。只ひる路次
 しとくとあるといふ。ささば冠者の物各せと。難は臨まき。銀ある渠
 小も願取せと。惠を忘れぬゆゑささば人へ言くゆと。これも

亦その愚直小愛つ。旅宿小伴う。既小機密を告り用ふるもあふん
 とく今宵も竊よ。おとすは。ささば蒙二郎が背小負し。ゆめを
 尼が弁へとく遣。あふか。懸念せむ。あふか。あふく大功を立よ。ゆめ
 智術を感。ささば西義士も。ゆめを膝うち。敲れ。ささばの如く。ささば既よ不
 測の助けあり。皆是姫の洪福あり。ささばも。柵中へ潜び入る術ぞあふん
 せけん。と再と。問は。義秀の懐。ささば。彼繪圖を。ささば。月下小うち
 披見西士も。ささば。こ。見。ゆめ。獄舎あり。ささば。城門あり。館舎
 あり。先よ。冠者を救ひ。ゆめ。後小経任を。ゆめ。日。安房の海辺。ゆめ
 人と。甲斐あり。ゆめ。水煉へ。人。譲ら。ゆめ。散斬。ゆめ。水底より
 ゆめ。易。ゆめ。西士の。ゆめ。爲。ゆめ。蓮姫の。ゆめ。盥。ゆめ。究竟のゆめ
 あり。ゆめ。釣索。ゆめ。岸。ゆめ。引。ゆめ。石。ゆめ。繫。ゆめ。通。ゆめ。被。ゆめ。監。ゆめ。く。ゆめ

へ。その餘のりも如此。とある。固様とて説諭せば廣光嗣忠やましく
 勇ましく共侶ふその繪圖をこころその武略ゆそ後の多折しもあれ遠き
 寺院の鐘声又香こと昔こと且に義秀耳を側くことと豫てり計る
 所今宵丑乙の比及小柵又潜び入るとあり。いとも短夏夏之夜小長
 物語時を殺し。既よとや時刻小あまぬ西士乃軽く打扮せよとれ
 甲夜まてこの如小あまの樹立あると我知ましくこの堂あはるをまじり
 小圖らざも足を休めく。そよとれ談合谷を得たり祭る神牧佛飲
 と頭を回し。透しあめてうち驚きさう堂々鳴り。霎時黙禱し退れて
 又左右と見えり。西士のまををんばや。この堂いつく荒し。とも本
 尊ハ不動明王あり。こと安房小在し。とれ養父の雙言を敷んとく。莊
 司躰の不動堂小夜をよる。素懐を遂り。後又加北へもたれ。又ま小

砥並山を越るとく。俱利伽羅堂のほろもやく。岡田親義が火の為小そら
 怨敵を鎮めり。あま今宵又この不動堂小同志の西義士と會合し。く
 友の為小仇を敷んと欲し。既小あまはとて。この感応今亦空し。かるべれ。
 加旃俱利伽羅山。不動堂は通夜せし。とれ假寐の夢の中小これと
 養母と一云と送小あま。白骨を霎時争ひ。為体嚮小乙二標吉と知
 らしく挑し。小相似し。彼ハ夢寐の妄想も。是ハ不測の再會あり。
 一虚一實神明佛陀の孝友を慰め諭を致かま。又養母小も還り。
 あふ日のあま。とれ只あひ。とれ亡母の。像見小送を。を價の重宝俱利
 伽羅丸の一刀を。魔を鎮め。妖を攘ふ。切あは。小あは。えあ。と。縦経任
 術の。風を起し。雲小乗るとも。頭打落し。く。と。勢ひ。龍で。拔試る。
 尖より。鏝除や。ち目成り。又ち目成る。夏も。寒れ。刃の光り。孰を月と

見らるるふ肉をこころもく日光くうさまが廣光嗣忠ホハこの名刀と感心
 耳を澄し目を驚し共侶又嘆賞し齊一堂内小進を向ひ志願の吉成
 黙禱を當下義秀ハカを口と腰ホカさめ廣光ホと心ぞぐり舊の
 塹土端小近つれ又西人小耳語示しごが為まが索又携り下りて
 の内小入る左右の膝ハ外又餘りて全身蓋より大なることとを輕け
 めく坐さまとも沈まざり廣光ハこは成んて嗣忠と目をありむう坂上大宿
 祢田村九ハ身の重なり二百斤輕れとも六十四斤動靜機小合し輕重意小
 任し怒り眼を回さる猛獸も忽地散れ咲く眉を舒るとをハ
 稚子も早懐しといふ又こ今義秀もさる儻たる勇士少そと密語ハ
 點頭つ共小感嘆あうけるかま義秀ハ盃の縁小鈎索をうち掛る
 竿を掃り溝門の脚より漕入ると向の岸より石磴又登り別は

一條の鈎索を解け楚と盟の縁小うち掛け初の索を引動せ廣光
 ホもその意成ゆるかまふとて索を引徐よその成る縁上は
 盃ハ舊の岸小来たり第二番より廣光ここの索小携りて岸を下り
 盃小入ると義秀の所作小做り果し初の如く向の索を動せ
 義秀躬く引らせりかくて廣光ハ竿を挿ふ及ぶとを溝門の
 内小入りぬ第二番小嗣忠渡りそのまが所義秀廣光の如く既渡り
 果し義秀ハ兩條の索水中小投沈め盃を石小打當て碎ること
 を捨けり廣光嗣忠驚れ竊小その故と向め義秀うち含笑
 くと兩士まのまごのむや吾們今この柵中小入るとは冠者を救ひ経
 任を殺さしとふふとれ吾黨一の城戸よりゆんとも二の城戸より入ん
 ともその隨ふべし又奚を盃を用ひんや渡り果し盃を碎れハ

古人船を沈むの邊意をよみ思ひまじむと密語を廣光も嗣忠もその
 膽勇小感服せり。折々柵外に戦ひありと申す。鯨波遙小ゆえ
 賊兵の大なるを二の城門小聚合けん。わら小入氣をさす。義
 秀も先小立く。獄舎のほろもよむ。義邦の繫れ。いづれなると
 思ひ難。傷と見え守屋あり。裏面ゆれ賊卒西三人。いまご寝も
 せ。守くを。義士ホがそのうち穴規の氣怪し。や認たん。小く棒を
 引提。走し出んと。知を廣光嗣忠立塞り。門邊に二人を破せ。六
 残る一人。驚えおそ。潜り出。逃さ。小声を揚んと。程小嗣忠
 追蒐。撃留。その間。義秀も獄舎の鎖と捺。義邦と扶出
 せ。廣光嗣忠進。ま。月影。小。人。か。う。の。言葉。あ。て。共。侶。小
 涙。さ。び。む。わ。る。り。義邦。の。ひ。げ。け。る。こ。こ。武。技。出。し。人。を。誰。と

ん。小。絶。く。久。し。義。秀。あり。又。廣。光。嗣。忠。も。相。隨。や。才。小。な。れ。は。の。そ。も
 夢。飲。と。な。る。小。羞。て。や。進。ま。る。義。秀。う。ら。見。て。声。を。低。う。し。冠
 者。恙。あ。る。り。牧。子。が。く。又。人。の。く。後。小。説。と。も。傳。え。小。あ。ら。ど。既。小。丸
 身。を。救。ひ。ぬ。と。又。經。生。を。撃。んと。欲。ま。さ。が。冠。者。の。この。月。あ。る。縲
 綆。の。中。小。疲。勞。く。思。あ。ま。ぬ。働。れ。ぬ。う。ら。廣。光。を。副。と。折。ぐ。は
 時。夏。を。撃。取。て。氷。雪。め。よ。又。彼。知。り。も。獄。舎。あり。何。れ。の。擒。れ。ると
 同。へ。義。邦。隨。を。改。め。思。ひ。ま。る。れ。朝。夷。ぬ。廣。光。嗣。忠。共。侶。小。い。づ。れ。潜。ひ
 入。り。の。小。神。出。鬼。没。と。い。ふ。の。き。再。生。の。思。須。弥。と。高。り。又。彼。獄
 舎。小。擒。と。の。共。ま。い。ぬ。比。寄。り。泉。川。の。敗。軍。小。生。拘。ら。ま。る。難。兵。え
 三。四。十。人。の。や。あ。ら。う。人。繼。彼。亦。を。從。へ。と。賊。徒。の。ヨ。ら。小。比。れ。は。る。九
 九。牛。が。一。毛。あり。おん。万。夫。の。勇。あ。ま。と。經。任。を。奪。取。と。と。さ。り。

形と詰む義秀ゆめと世介とち笑若夫虎穴ふ入らむと虎の子を
 獲んや。これかのおつら。知分あり。心を苦しめぬ。と回答く。件の獄舎に
 赴き又その鎖を探ぬ。藪子と推開く。俘兵ホよち對ひ汝ホ驚死
 怪むへうと。これ義邦の方人。今この柵を火攻しく。経任を敷取ん
 と欲む。さればと。脚腰弱り。汝ホカを借ん。ゆめあふ。汝ホの彼
 知る。林の中。小躲聚て。如此と。めく。賊徒と欺れ。柵火を放とん。バ
 齊一鯨波を揚よ。この外。必要あり。と言古せり。説示く。懐中より。續
 紙の紙。いく。巻う。取出と。紙の端。糸を結び。さげ。糸の端。小石と
 著り。そが。や。よ。の。或。遞。与。よ。ん。俘兵。ホ。を。詰。ま。ら。ん。が。杖。出。さ。れ。ら。ん。が。
 歡。一。議。及。び。受。取。く。衆。皆。林。の中。小。赴。れ。義。秀。が。教。一。如。く。
 紙。を。稍。と。投。掛。し。糸。を。樹。枝。に。掃。り。留。り。垂。る。紙。の。風。の。や。よ。く。翻。籠。と

肉をく軍兵。夥。籠。る。旗。の。と。く。小。ん。え。く。り。その。間。小。義。邦。主。従。の。命。め。で
 とき。再。會。の。鉄。び。を。述。意。中。を。生。り。廣。光。の。日。刀。の。そ。の。一。刀。と。み。て
 ころ。と。義。邦。不。進。と。これ。へ。嗣。忠。の。獄。舎。口。小。樹。の。短。鋒。を。擲。取。と。義。邦。と
 廣。光。と。遞。与。り。抑。この。獄。舎。の。邊。へ。左。右。小。土。堤。あり。後。林。あり。軒。稍
 盡。と。知。り。と。要。の。の。の。入。り。況。曉。ち。れ。比。賊。徒。の。ヨ。ク。柵。外。小。打。出。て
 寄。と。戦。小。窟。中。あり。これを。知。る。の。あり。け。か。く。廣。光。の。雲。時。も。主。乃
 和。と。義。秀。と。敵。の。動。靜。を。窺。ぬ。一。度。は。敷。く。お。ん。と。ち。小。躲。ひ。く。と。る。程。小
 義。秀。の。嗣。忠。不。准。備。の。火。薬。を。分。与。と。ち。彼。此。小。火。を。放。且。林。の中。あり
 俘兵。ホ。も。その。煙。を。望。く。暗。號。を。違。へ。竹。を。糸。し。木。を。動。く。鯨。波。を。揚。げ。

中輯第二十八

一二 関乃 攻鼓
 四 孝子の 怨双

これより先城戸四郎武詮のその夜四更の比及ふ十四輛の兵糧車と隊兵
 二十名小推せり。潜りたる体あり。水草太郎五が陣門へ牽入る如道
 つれ多。この時平泉の柵より遠見の賊兵亦これを見ん。一の城門を
 守る。珍浦五十五六小告ふけ。五十五六あるは外へあはれ。原来
 寄りの兵糧竭く。あはれ外へ求め。彼り食不飽。その躬方の
 為小害ある。いで踢散り。と見え。敦圍あつて。歩卒とりて。経任小
 報知らせ。城門を颯と開け。馬を真先小乗出せ。その隊の賊兵二
 百餘騎。驚直小走。出する勢ひ。群虎の羊をこん。相争ふ。異なる。と
 水草太郎五が陣門を横筋違小推隔く。突然と。競ひ。蒐。と
 武詮ホも謀。如く。須臾も柱。と。車を捨て。逃。時小陣門
 の内金鼓大。紀。水草太郎五。昌之。百五十騎を。殺。出。賊軍と

推隔く。車を引入。んと。當下賊將五十五六。二百餘騎を。二隊よ
 引。その半。とり。車を奪。せ。つ。昌之。一軍を。遊。留。めて
 突崩。せ。昌之。が。百五十騎。立足。も。偽。負。陣門。成。望。て。退。くと。
 三。及。む。追。捨。り。その。間。小。一。隊。の。賊。徒。武。詮。ホ。を。打。散。り。既。よ
 車を。奪。ひ。五。五。五。六。と。成。推。さ。せ。柵。小。入。んと。程。小。昌
 之。と。又。士卒。を。進。め。く。追。携。り。跟。入。んと。追。へ。賊。徒。ハ。取。り
 返。り。撃。靡。け。と。引。り。昌。之。再。び。逃。走。ま。又。寄。り。の。本。陣。小
 鯨。波。大。く。渡。り。摠。大。將。賀。光。仲。佐。味。下。河。邊。を。左。右。小。備。へ。之
 百。餘。騎。を。魚。鱗。と。立。り。徐。々。と。ち。知。り。賊。徒。も。亦。これ。を。見。て。距。大
 吠。又。二。百。騎。の。賊。兵。を。繰。出。り。珍。浦。五。五。五。六。を。翼。け。り。車。と。城。門。小
 引。入。り。寄。り。の。陣。より。柵。を。去。り。と。僅。小。三。四。町。あり。光。仲。ハ。柵。中。より。

賊徒の加勢ゆるがゆへに敢又戦ひを好むを。水草昌之が士卒と合
 してその勢四百五十騎一の城門を推し御方の暗跡を俟て
 けるか。程小城戸四郎武詮の勇卒十名と共に袖識を擡投
 棄て賊徒の中を雜り城門の内へ入る程小経任も初より腹心乃
 兵五七名を従へて登りて西南の城樓あり十里の外を隈も
 たる鮮明の月と燭小勝負を目前に直下する戦ひの爲体あるは
 くるるの影を馳せ密使を走らし五十五六歩の寄る夜を
 たるる潜中へ兵糧を入ると程小程一歩も程小遠に陣營乃北
 へと入り牽入ると程小程とをる程小程を柵小程近に陣門へ入るとせり
 態と敵小をせん為歟且その車究めと輕し何とる程小程の數を十
 四五輛あるは推しとる程小程の二十人小過さる程小程實小程の兵糧を積

の程小程人その軍一輛毎小四人が力を勤めとる程小程動きて
 されらの理りゆに推しとる程小程の偽者をたのその詭計を行ん
 とて柵へ入るゆへに汝ホとる程小程と謀めとる程小程を竊
 上目を行へと五十五六もその意はとる程小程と軍柵へ入る程小程
 した散るとは許さむとさ声はとる程小程と立てとる程小程衆人
 將軍聰察睿明今この中小敵の軍兵紛へたる程小程と
 その車とる程小程の兵糧とる程小程と藁囊を解ふ紛明ありん
 柱るゆへに有とる程小程の生拘れと高中小程とる程小程と
 駁群立ち或は藁囊を引落し或は刃を抜合とる程小程と切解ん
 詮へ計略の度覚れとる程小程と此も擬議せむとる程小程と刀を
 近する賊兵をむとる程小程とと斫倒しとる程小程と五十五六を
 撃んととる程小程と血刀とる程小程と振り

走り遠く衆賊齊一驚駭たり。原来瘴者。是也。撃留人と推隔立果る。彼ら此らと混雜しく。同士撃をうけけ。彼十個の勇卒へ武詮小力を勦く。或へ進み或へ退死或へ頭を隠し千変萬化乃術成盡す。あめく必死の大刀風。賊徒へひく。辟易しく。撃りぬの敷をさす。さうは五五六吠又へ二の城門を鎖固めて。方小眼を配り。麾うち揮り進退せり。これゆり賊の大勢。稍武詮ホと認めり。十隔廿重ふり。困り追詰り。攻りて。武詮弥高ふ。たかきとも五五六ぬも吠又。ゆも竟ふ近づく。或るを士卒へ残らむ。戦殺しく。日が勇も既小浅疾。負ぬ縦項羽が勇あまると。脱るべくもあらず。面小鮮血を流す。死骸の上小伏累り。陽没を居る。程は光仲も一の城門小推しせり。武詮が暗晝を俟ふ。忽然と。後の方より馬埃月を

見せ。殺の賊軍。是則別人。賊將鬼六猛虎。七百餘騎を二隊小備へ。東の城門より推出。その一隊三百騎。もう陣營小留り守り。寄りの壓り。遠く後方小備へさせ。日が方へ四百餘騎をひく。光仲を撃ん。撃を遠く近つたり。光仲遙ふ。或る。驚愕。原来日謀就。武詮ホも。替れけん。賊徒を。後を。前より。亦撃り。出さ。武詮は。脱る。柵の。敵の出ぬ。疾撃。散り退け。とせり。備を立更せ。高吉昌之士卒を進め。箭を射ち。又を。賊軍の真中を推通んと戦ふ。程は五五六吠。又衆賊を引卒て。城門を。推開せ。光仲の旗。さる。咄と。嘯り。突萬。寄りの前後。敵。受て。忽地の。靡。撃り。少。高利へ。柵。敵。逆へ。

且く挑戦ふ。素立。癖。頻。乱。備。後陣。鬼六。一軍。遠巡。又光仲。賊徒。捷。乗。駐立。撃。義。仗。恥。知。寄。士卒。豫。今。最期。軍。決。射。突。撓。去。引組。刺。推伏。推伏。額。取。あり。取。あり。新隊。入。馳隔。推包。光仲。撃。前後。競。蒐。光仲。馬。受。遣。馬。巴。字。小。乗。遠。近。敵。切拂。大将。既。か。如。士卒。苦。戦。先途。防。入。替。兵。折。勢。穴。窮。又。替。

少。脱。光仲。熱。小。賊。の。小。か。らん。あ。馬。上。腹。切。上。帯。折。掛。中。小。猛。火。燃。度。火。燄。四。方。小。散。乱。鯨。波。遙。渡。素。肌。武。者。身。長。九。六。尺。許。金。剛。力。士。の。暴。如。大。刀。を。真。額。一。抜。殿。獄。舎。の。走。吉。見。冠。者。義。邦。亦。と。断。金。の。友。垣。結。朝。夷。三。郎。義。秀。の。小。あ。里。経。任。呼。二。の。城。門。は。聚。合。賊。兵。亦。が。真。中。へ。雷。霆。の。落。如。真。一。丈。字。小。走。入。破。仆。踏。殺。を。力。量。早。技。萬。夫。も。前。瞬。間。は。數。十。人。の。首。地。上。散。乱。骸。へ。彼。此。は。横。投。算。木。小。彷彿。是。の。嗣。忠。義。秀。小。後。鋒。を。雷。電。の。閃。駑。騷。賊。兵。を。殺。突。伏。せ。敵。散。義。邦。亦。廣。光。共。侶。走。出。名。乗。か。の。奮。戦。突。戦。

遙あるこの林の中ま。三四十人の囚兵木竹を糸。樹を動。鯨波を揚。
 ころ小曉の風烈しく。兵火の勢ひ甚しく。是首の守屋彼首の築垣。敵とありて。
 燃上ま。敵射方の際を。ゆゆさる。二の城門。成の賊兵。木へいしく。驚死。
 せし。聯と。この柵内。大敵あり。天より。降る。又地より。涌る。又。逃。よ。
 外と。叫ぶ。山。辟。と。推合。衝倒。さ。踏。れ。死。さ。も。多。め。と。さ。れ。ば。又。
 城戸四郎武詮。ハ陽。殺。を。必。を。脱。折。ら。ん。敷。く。出。ん。と。且。く。透。を。
 寛。程。小。賊。將。五。五。六。吹。又。ホ。も。既。又。柵。外。又。ホ。も。一。の。城。門。を。固。め。る。
 賊兵内。も。多。る。ま。車。小。近。つ。と。も。ゆ。さ。ら。御。方。の。勝。負。い。ふ。あ。ん。と。獨。
 せ。ろ。成。苦。あ。る。折。ら。柵。を。火。攻。し。内。御。方。を。援。る。あ。り。二。の。城。門。あ。る。
 賊兵。木。へ。ま。が。為。小。敷。散。さ。と。火。敵。頻。は。飛。遠。一。の。城。門。の。塙。城。又。牽。
 捨。る。車。中。も。その。火。程。ま。藁。藁。の。火。藻。幾。突。走。り。その。辺。た。る。賊。卒。ハ。

面を焦。し。足。を。焼。し。矢。庭。小。死。さ。り。の。多。る。衆。賊。こ。ま。不。駭。死。處。と。不。
 覚。城。門。を。開。け。皆。外。面。へ。逃。ん。と。武。詮。こ。れ。よ。力。を。尽。く。崖。破。と。起。く。
 血。刀。を。揮。り。煙。の。下。小。殺。と。廻。ま。度。を。失。り。賊。兵。木。へ。敵。一。人。と。名。ひ。も。け。ぞ。い。
 け。ま。奈。ま。と。逃。り。と。く。跌。く。め。の。朋。小。踏。れ。後。さ。め。の。武。詮。が。又。命。を。預。り。
 か。り。程。小。柵。外。あ。る。賊。徒。ハ。件。の。変。小。駭。き。原。来。野。心。の。ゆ。え。と。内。の。火。を。
 放。け。攻。む。や。内。外。又。敵。を。受。て。か。あ。る。且。退。れ。後。中。を。敵。を。移。め。火。
 を。滅。さ。め。退。け。や。と。相。喚。叫。ぶ。勢。ひ。更。小。た。め。不。似。む。勝。誇。さ。る。氣。屈。し。
 敵。果。ま。死。敵。を。捨。く。退。き。入。ん。と。程。小。内。より。遠。く。逃。出。る。射。方。を。送。小。
 敵。と。僻。認。し。退。く。め。城。門。小。入。る。と。進。む。又。同。士。敵。と。一。
 け。ま。寄。ら。枯。稿。の。雨。は。活。死。鱈。魚。の。水。を。獲。り。亦。何。を。異。あ。る。光。
 仲。ハ。目。之。と。神。井。鬼。六。を。逆。敵。せ。高。利。高。吉。共。侶。小。忽。地。備。を。立。る。月。

退難る賊兵の後方より推蒐く拊切めをまきりける。當下五十六吠又之
 躬方を退らせん為ふ斬土梁又馬を駐めく。近く敵を切拂ひ雲時へ柱より
 けしども寄心の大刀風尖しく。ゆるめくもあつて六吠又ハ泳ぐも戀つて牽
 回し城門へ入らん。城内は俵を武詮が双小馬の脚を拂と真逆さるふ
 落し味高利あり。飛ぶが似く小馬を進めく起んとよる起しも立を
 薙力をとり伸く。細頸丁と打落せし珍浦五十六吠又ハ驚死をこれと
 柵へゆるぎ透を穴規ひ鬼六と一隊はまると程小下河辺高吉賊將と
 見くけしバ矢庭又馬と馳よせく五十六小引組く。操伏んと挑まん。こは彼
 鐘を踏外し西馬が間と撞と落て上小より又下小あり。且くハ挽合高吉竟ふ
 乗懸く押して頭を取らけり。この一の城門のわきへ柱する賊兵あり
 やくは先仲ハ又更に経任を撃取らん。煙を犯し士卒を進めく。柵中に

騎入り。その中小水草太郎五昌之ハ塹を距ると一町許絶ふ六十餘騎をのこ
 神井鬼六猛虎が四百餘騎は駈向の面も焼く。衝く入る。寡兵されども勇
 わり。賊徒ハ其勢ある物なり。既小柵を火攻せしむ。且五十六吠又ホハ一軍
 しく撃破らる。又彼寄心の陣營の壁もしく備ふ。二百騎の同類もて退死
 失ふ。皆十二分の鬼胎を抱えく。戦んとゆるめく。忽地ハ衝崩さる。移り
 あり。逃あり。寄心ハ只管追殺し。或ハ生拘り。或ハ移り。漏さると追鬼あり
 當下賊將鬼六ハ逃る躬方を罵辱めく。返せくと呼ぶ。後へくもわらふ。乃
 共小馬を牽回し。退死走んとす。程小水草昌之信と云ん。這奴ハ鬼面乃
 兜あり。且その耳隠し神鬼の二字を識著し。是必鬼六あるん。とん中も猜し
 馬又拍し。兎賊鬼六何知へと。逃るも。逃さんや。これハいぬ。二月某の日口澤の
 岸より。汝が為小敷。水草十郎昌甫が一子。太郎五昌之の氣をまきり

君父の讐敵やも漏まらぬ刃と受よと呼々々振肉を薙刀の雲間を穿秋の
 月の水ふらん流る似く透もあせむ掻刃尖をのめくやと鬼六の巨刀を
 りて受とめ引けつ入里拂へ沈一上一下とうち合さる刀尖より火花を散く
 卒合あまり戦ふる鬼六賊中めく大剛のめりまけさ敵の弱武者たるを
 見て山及小懸く打大刀尖く掛声ささる材狼の人を啖んとる勢ひあり昌
 之今茲ハ十七歳尚幾冠の齡あるごと武藝勇悍親倍進退恰も倍
 羅摩野雞の蛇を征まる術あむさられ數度の苦戦より器撤さ小疲勞れ
 けん薙刀の柄の度毀と折る大刀を抜く小暇もな残る柄をりて受とめ受
 ちがく戦ふ光景いとも危く見えたりけるされが又城戸四郎武詮ハ一の城門の
 内外より賊徒を夥敷取り斬すの橋の高欄小身を倚り少選息を吐く程小
 こころを逆あてり水草太郎五昌之と賊將神井鬼六と尺二騎挑む戦ひ

昌之危く見えたり吐嗟と進む足邊は賊兵が遺りるら前を取走り
 近づくと引く弾と度せが窟遠む鬼六が眉間を貫き深く破と射る炎所
 の痛も小霎時も堪を馬より控と轆落さ昌之透さ馬乗放て怨の
 刃抜くも刃せむ頭を切てさ揚る現今曉の戦ひ小城戸水草の両
 勇士六萬死を穿て賊軍を殺靡け遂に神井鬼六を相撃り父兄の怨を
 雪めり武運愛した仕仗ると人々後まで感ドける案下某生再説言
 見冠者義邦の義秀と共小進と賊徒を撃んと迅りく廣光の後方より
 主の袂を引とめ劍戟をり敵を撃分捕切名せんと志をのめ皆是士卒
 の所為よとて大将の希ふべなる小あを且君ハ久しく固固の中小勇を論
 めく氣力衰へひけん況又素肌ぬく軍馬の魁とて願と心殆く廣光
 君の名代とて随分働かぬ目さ敵小あごるる匹夫の勇小傲ひぬる



神井鬼六



所を異ふ
 一々四子
 怨を報ふ



水草太郎五

後悔其所こころ不な立たうら。且かつくも心こころ必かならずびおうら。といひし。嗚な呼こ諫いさ止とめく。この身みハあるは械が引ひ提ひ。
 又また賊ぞく軍ぐんはあ走は向むかひぬ不な題だい刀たう野の太た郎らう時とき夏なつハあ文ぶん字じ指さ暴ばう道だう亦またをを殺ころすべしとこの奸けん計けいをを入いふまさまととくく風ふう聞き大だいくくああららぎぎままららくく竊せつ小せう鬼き胎たうとと抱だえく逃に去そんん。
 といひし。鬼おに六むがが隊たい卒そつししくく守まもりし。これこれハハ竟つひ小せうのの便べん成じやうぬぬまま。
 かかくくこのこの曉あけはは柵さくをを義ぎ秀しゆホホはは火か攻こうせせししてて柵さく兵へい内うち外そと不な敗ばい北きたしし。或あるハハ亦また前まへ後ご乃なり。
 城きやう門もんよりより逃に去そるるものものももままららくく時とき夏なついいくく敬かう馬またたくくいいふふせせままししとといいひひ。再また次また。
 思おもひひ時ときのの難なん義ぎハハ結けつ句くココガガ才さいのの幸さい々ざのの紛まれれとと小せう脱だつれれんんとと刀たうをを腰こしふふささししてて西せいくく。
 里さとをを何なに知しとといいひひ定さだままるる俄いつぱ頃ころ小せう旅りょのの准じゆん備びをを賊ぞく卒そつホホガガ中ちゆう小せう雜ざつにに後ご関かんよりより逃に去そるる。
 といひし。このこのとといいふふもも義ぎ邦かうハハ廣かう光かうはは諫いさららまましし。且かつくも其その如ごとくく立た在ありり。曉あけがが近ちかきき。
 兵へい火かのの光ひかりハハ逃に去そるる賊ぞく徒たををコこんんととああままらら。中ちゆう小せう時とき夏なつああらら天てんのの祐すけとと雀すず躍たつしし。
 衝つらら短たん鋒ほうをを小せう腋あしはは引ひ著つけけ外がい面めん遙とほくく追お追お蒐そうとと更さらはは前まへ面めんををコこんんととここををババトト三さん。

日ひのの月つき傾かたむけく漸お々お漸お々お西せい山さんハハ入いるるああららうう。秦しん火かのの光ひかりハハ限かぎももああらら。脱だつれれ空からるる賊ぞく兵へいホホハハ。
 才さいハハ彼か此こハハ散さん乱らんしし。時とき夏なつハハ只ただしし。噤しんをを北きたへへ五ご六ろく反はん走そうりり過あへへるる程ほど小せう義ぎ邦かうをを。
 喘あせ息いき追おひひ近ちかづづけけ声こゑをを立た立た反はん賊ぞく時とき夏なつ且かつくも等らうとと喚わん笛ふえららままららくく。驚おどろろけけ後ご。
 方かた遠とほくく回かへ顧こみみふふ。これこれハハ追おひひめめのの義ぎ邦かう也なり。とといいふふ。外がいハハ又また續つづくく兵へいああらら。これこれハハ。
 這こ奴やついいくくむむららののああらら。走はるるももああらら。小せう所ところ為なるる。只ただ一ひと刀たうハハ結けつ果くわとと。
 去こ年ねん来らいのの熱ねつ腸ちやうをを冷ひやんとと漫まんらら。侮あやむむ。榛しんのの弱じやく木きをを小せう猪ちふふららてて刀たうをを引ひ。
 拔ひ立たししりりけけるる。當あたりり下くだ義ぎ邦かう此こレレもも擬ぎ議ぎせせずず。短たん鋒ほう成じやう肉にくりりとと取と直ちやくしし。
 足あし場ば程ほどししくく立た向むかひかをを。時とき夏なつ昔むかしををいいひひ。汝なんぢがが親おや刀たう野の備び杖じやう照てう時ときハハ非ひ道だうのの。
 矢や尖せん小せう母ぼをを喪なひひ。これこれハハ又また汝なんぢがが為なすす。至いたるる罪つみ人ひとととああらら。小せう家けをを喪なひひ友ともをを。
 苦くるししのの老らう黨たう小せうままらら。離り別べつせせ。怨うらみみハハ今いまささららああらら。及およぶぶ。照てう時ときハハ枉かた死ししし。復ふくをを。
 由よしるる母ぼのの讐しゆう天てん運うんすす。小せう循じゆん環わんしし。汝なんぢをを襲おそへへ。亡な母ぼのの灵たまをを聊りやう慰ゐむむ。ここがが。

留^{とど}り阿^あと苦^くむ声^{こゑ}も引^ひけむ。傍^{かた}の株^{かき}小^こ推^お著^つてそ^のま^ま鋒^{とが}を楚^そと突^つ捨^すて
 ち^ちを抜^ぬけり。首^{くび}を丁^{てい}と打^う落^おせ。藁^{わら}二^に郎^{らう}ハ歡^{かん}喜^き小^こ堪^{かん}む六^{ろく}尺^{じつ}あまの横^{よこ}
 溝^{みぞ}を飛^と踰^{ゆう}て走^{はし}る。短^{たん}刀^{とう}を抜^ぬき。雙^{すわう}敵^{てき}の軀^{こゝろ}を刺^さ徹^{てつ}。砍^き切^{せつ}。今^{いま}を怨^{うら}む。敵^{てき}
 主^{しゅ}役^{やく}が這^はり西^{せい}をみ。伏^ふき。あ^あれ親^{おや}とふ。向^{むか}ひ。嗚^な呼^こ密^{みつ}る。哉^{やい}
 天^{てん}の応^{おん}報^{ほう}果^{くわ}せるま^ま人^{ひと}の誠^{まこと}心^{こゝろ}義^ぎ邦^{はう}をぶ^ぶく。石^{いし}を道^{みち}ま^まく。雙^{すわう}敵^{てき}時^{とき}夏^{なつ}と替^かり
 人^{ひと}寔^{まこと}はそ^の所^{ところ}あり。又^{また}この藁^{わら}二^に郎^{らう}が如^{ごと}く。只^{ただ}是^{これ}吠^い吠^いの匹^{ひつ}夫^ふみ。大^{だい}刀^{とう}わ^わる。ま
 べ^べ死^し術^{じゆつ}をま^まど。敵^{てき}を征^{せい}する。め^める。ね^ねども。その孝^{こう}。その義^ぎ。世^よの^よ人^{ひと}は。馬^{うま}ま^まてる
 所^{ところ}あり。ま^まど。遠^{とほ}く。下^{した}野^のより来^きり。故^こ主^{しゅ}を資^{すけ}け。雙^{すわう}敵^{てき}時^{とき}夏^{なつ}が軀^{こゝろ}を刺^さて。ま^ま
 ら。素^す懐^{くわい}を遂^する。彼^か城^{じやう}戸^こ水^{すい}草^{そう}の西^{せい}勇^{ゆう}士^しと。又^{また}この吉^{きち}見^{けん}主^{しゅ}従^{じゆ}と。如^{ごと}く。聊^{りやう}異^い
 あり。ま^まど。これ。彼^か共^{ども}。同^{どう}時^じみ。且^{かつ}仇^{あだ}敵^{てき}の。為^{ため}態^{たい}畧^{りやく}相^{あひ}似^に。奇^きとま^まど。一^{ひと}若^わ夫^ふ
 この書^{しよ}を繕^{つくろ}ひ。看^み官^{くわん}。その惡^{あく}報^{ほう}を。入^いる。み^みぐ。警^{けい}め。この名^な報^{ほう}。ゆる。ま^まど。い^いま^まく。

將^{しやう}大^{だい}時^じ小^{せう}厄^{やく}難^{なん}あり。ま^まど。竟^{つひ}小^{せう}陶^{たう}運^{ゆん}の域^{いき}。至^{いた}る。抑^{おさ}も。亦^{また}ま^まど。間^ま話^わ休^{きゆう}題^{だい}
 義^ぎ邦^{はう}ハ。心^{こゝろ}ひ^ひり。多^{おほ}く。藁^{わら}二^に郎^{らう}小^{せう}再^{さい}會^{かい}せり。その勢^{せい}大^{だい}ま^まど。あ^あら。ま^まど。そのま^まど。故^こを
 問^{もん}小^{せう}藁^{わら}二^に郎^{らう}ハ。こ^ころ。入^いる。義^ぎ秀^{しゆ}の。又^{また}義^ぎ秀^{しゆ}の。指^{さし}揮^き小^{せう}より。ま^まど。後^ご姫^{ひめ}と。云^いふ。云^いふ。尼^にが
 菴^{あま}ま^まど。送^{おく}り。届^{とど}く。縁^{えん}由^{ゆう}を。告^つ小^{せう}ま^まど。義^ぎ邦^{はう}ま^まど。救^{きう}ひ^ひく。その義^ぎ信^{しん}を。賞^{しょう}嘆^{たん}。ま^まど。こ^こ
 義^ぎ秀^{しゆ}の。義^ぎ勇^{ゆう}ゆ^ゆり。不^ふ思^し後^ご小^{せう}虎^こ穴^{けつ}を。出^いで。ま^まど。ま^まど。後^ご姫^{ひめ}の。ま^まど。入^いる。ま^まど。い^いま^まく。と
 問^{もん}小^{せう}暇^{あま}ま^まど。心^{こゝろ}ま^まど。か^かる。の。ま^まど。あ^あれ。吾^{われ}妹^{いもうと}ま^まど。小^{せう}再^{さい}生^{せい}の。幸^{さいわい}あり。ま^まど。外^{あひだ}あり。ま^まど。
 皆^{みな}彼^か人^{ひと}の。賜^{たま}ひ。り。救^{きう}人^{ひと}み。ま^まど。小^{せう}滅^{めつ}あり。ま^まど。ま^まど。亦^{また}滅^{めつ}あり。ま^まど。んや。再^{さい}び。朝^{あさ}夷^い小^{せう}力^{りき}を
 勦^{くわん}。寧^{ねい}徑^{じやう}仕^しを。滅^{めつ}ま^まど。汝^{なんぢ}ハ。直^{ちやく}ま^まど。菴^{あま}の。い^いれ。復^{ふく}雙^{すわう}の。顛^{てん}末^{まつ}を。後^ご姫^{ひめ}小^{せう}告^つ
 問^{もん}小^{せう}の。け^けく。角^{かく}を。起^{おこ}す。折^せる。江^え二^に廣^{くわう}光^{くわう}ハ。ま^まど。賊^{てき}徒^とを。敷^{しき}靡^ひけ。舊^{きゆう}の。如^{ごと}く
 本^{もと}ま^まど。小^{せう}義^ぎ邦^{はう}其^{その}如^{ごと}く。在^ある。ま^まど。あ^あれ。彼^か此^こと。索^{さく}ま^まど。又^{また}柵^{さく}外^{がい}を。こ^ころ。ま^まど。招^{まね}
 ま^まど。取^と聚^{あつ}ひ。ま^まど。義^ぎ邦^{はう}ハ。廣^{くわう}光^{くわう}小^{せう}時^じ夏^{なつ}を。替^かり。夏^{なつ}の。趣^{おもむ}。又^{また}藁^{わら}二^に郎^{らう}が。早^{はや}速^{すみ}の

働たその既略を説示せば廣光はその首級取とて天の敵の地小喜入且葉二
 郎が遠く来ぬ。その忠心を感づく已に葉二郎も亦彼びく別れ泣の状を速馳之
 義邦廣光は辞し別れ去る。尼が菴へ赴くゆゑ廣光へ時夏が首級亦大コを添て
 携りて主の後へ又柵門の進へ入る兵火の光り衰へて煙の雲と立かつる東方を
 去る程又修羅五郎経任ハ曩小五十六鬼六ホカ類小提小衆を
 引く。橋慢る瘁るも今ハ光仲を撃つ小程あどとて城樓を下りて
 奥小赴見婢妾們小酌を執り酒うち喫く居り小獄舎のこゑも失火
 あやとく婢妾們彼此又騒く奔走を経任ハこの報をゆくといふ此も動
 せどその兵共が埋火の等閑あつたりいのでまゝ今あつて滅べたは騒ぐ
 とらふと叱鎮めく物もせざるふ又賊兵ホ注進まなく失火ハ躬方の諺
 たるを敵を柵中ハ横行く彼此又火を放まが猛火四方ハ散れく滅留

へうとゆらむ。その中ハ朝夷三郎義秀と名生る猛者あり。この程ハ義邦を
 獄舎より竊出せり。又彼が黨小江三廣光馬標吉嗣忠と名生るもの其武
 勇拔群へ只是のまゝむ獄舎のあつたる林の中ハ敵の大軍充滿く白
 旗を吹麻半鯨波を揚ぐ攻蒐んとて出させり。と言舌せり。告果て
 又外面へ走去ぬ経任ハこれハ醒る。つらくと想像る小夏實もあはれ推し
 あるとくむく夏の虚実を言て走らせり。声する中ハ呼立まら廣庭小聚合とて
 賊徒阿と応り中ハ鶴夜又鴉夜又と喚とる。而賊齊一身を起し。二の城門
 のまゝ走る。且く立り言状と呼び経任ゆくとく見とくあつて飲とく其
 ゆゑとのハ當下鶴夜又額より流る汗を振拂ひ扱も彼朝夷が火攻の為体
 皆く死するもあや。目子おと什とあり。壁ハ餓る獅子暴て百の獸を馳る。



義	身	賊	塵
秀	不	兵	小
單	と	死	を

松平

如^い誰^れ一人^も進^まむ^べ死^に血^は流^れと^く盾^を走^り屍^を横^り岳^をを^りと^りの^へ鳴^夜又^も
 語^を続^けと^く膝^を立^直一^面を^推抗^げそ^のの^とた^くと^く柵^外小^光仲^を殺^し靡^けし
 躬^方内^外小^敵を^受く^る忽^ち地^を辟^易初^戦の^勝利^は再^度の^敗軍^五十^五六^吠又^も鬼
 六^の諸^將士^既に^戦死^せり^敵前^後う^ろう^ろと^く火^勢も^共に^防が^をて^され^ばの^御
 座^をも^のも^のを^脱と^り今^のの^とら^かか^すか^の如^しと^同音^の報^る経^任
 安^あむ^も眼^を睜^く驚^嘆一^原来^大事^小及^び小^多遮^莫義^秀光^仲又^も日^れ小
 敵^をや^踏散^すと^厨川^へ退^入と^難小^あの^いと^くと^のみ^く鐘^を取^て夏^と投^被
 五^枚兜^の緒^を締^て八^角小^削か^す鐵^棍棒^を扱^き足^音を^きく^搖れ^ぬ端^近う
 幸^居る^馬小^肉りと^踏れ^ぬ隊^の賊^徒三^百名^前後^左右^小後^のの^二の^城門^を推
 固^く吐^きと^嘯と^走り^畢竟^経任^困を^衡と^脱と^り不^息と^次の^卷小^解分^るを^令と^ん

朝夷述嶋記全傳第四編卷之四

吉田屋

吉田屋

